

ヘルシンキ大学の日本語教育

植村友香子

ヘルシンキ大学の日本語講座は、人文学部アジア・アフリカ言語文化研究所、東アジア学科、日本学専攻に属している。1980年より国際交流基金の講師派遣が始まり、四レベルの講座体制をとるようになった。現在、スタッフはピルヨーリーッタ・クーシッコ（代行教授）と植村（国際交流基金派遣）の二名で、クーシッコが日本学の講義、植村が日本語教育を担当している。（なお1995年5月から、レイン・ラウト氏が日本学の正式教授として着任、秋の新学期より日本学の講義を担当することになっている。）

1994年秋学期より、大学に新しい卒業認定制度が導入された。旧制度では大学卒業は修士号取得を意味したが、新制度では修士課程（学士号+40単位）以前に、学士号（120単位）を取得して卒業することが可能となった。また、東アジア学科では日本学、中国学、韓国・朝鮮学がそれぞれ独立した専攻であることをより鮮明にうちだし、専門性を深めていこうとしている。

1. カリキュラム

1.1 日本語 — (1)～(4)は植村担当、(5)はクーシッコ担当

クラス名	時間数/週	レベル	95年春 修了者数
(1) 日本語基礎	3 h	初級前半	30
(2) 日本語継続	3 h	初級後半	16
(3) 日本語読解	3 h	中級前期	15
(4) 日本語会話	1.5 h	中級～上級	6
(5) 日本語文法	1.5 h		

使用テキスト

- (1) (2) 『An Introduction to Modern Japanese』 『BASIC KANJI BOOK』 Vol.1, 2
- (3) 『総合日本語・初級から中級へ』 『中級からの日本語 読解中心』
『INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol.1』
- (4) 『An Introduction to Newspaper Japanese』
その他、新聞記事を中心とする生資料

1.2 日本学 — クーシッコ担当

- (秋学期) 日本文化史 日本美学・芸術
(春学期) 日本における女性の位置・役割

2. 履修者

学生はヘルシンキ大学の学生が大半を占めるが、他大学の学生も中級以上のクラスには多い。学習動機は文化・社会への関心・興味からというものが多く、就職に有利だからというような実利的な動機はあまり強くない。学生は複数の外国語をこなし、語学学習に慣れており、自律的に学習する。

ヘルシンキ大学の学生であれば学科、専攻を問わずだれでも履修可能であるので、学生は様々な主専攻・副専攻にわたっている。

学生の中には高校生の時に交換留学生として日本に長期滞在したことのある者もあり、彼等は大学での学習開始時点ですでに基本的な会話力を身に付けている。

3. 問題点など

フィンランドにおいて日本学を専攻課程として設けているのはヘルシンキ大学のみであるが、研究遂行に必要な人材が不足している。

日本語担当のスタッフとしては、フィンランド人の専任講師がおらず基金からの派遣に依存しているため、講座としての継続性が保てない。またフィンランド人学生のための教材開発などが進んでいない。日本語の授業は四クラスのみで、「日本学研究の基礎としての語学力」という目的達成には時間数が圧倒的に不足している。開講されている授業をすべて履修し、さらに上のレベルの授業を求める学生も増えているが、その要求には答えられていない。

一方、日本学担当としては専任教授が一名のみ。日本学専攻の科目として、講義目録には15以上の講義が記載されているが、実際に講義が行われたのは上記の三科目であり、その他の科目に関しては、講義によらず本を読んで試験を受けるという形をとっている。